

【講演 1】『音楽大学におけるライティング支援 ～「社会」を意識して書くこと～』

高橋 典子氏

（大阪音楽大学・大阪音楽大学短期大学部 助教）

これから、本学の取り組みについてご紹介をさせていただきます。

本学では、日本語ライティング支援室という名前でライティング専門の部署を設置して、今年で丸 4 年になるのですが、私はそこで教員として現場の運営のリーダーのような役割をずっとしております。よろしくお願いいたします。

まず最初に、本発表の目次について簡単にお話させていただきます。

1、本学の概略、それから、本日のお題として社会との効果的な連携というものをいただきましたので、本学で考

えております「社会」について、それから、具体的な取り組みとして 4 つをお話しさせていただきたいと思います。

まず最初に、本学の概略をご紹介いたします。

本学は、大阪府豊中市にありまして、学部学科は音楽のみの単科大学です。大学と短大を並置しております。専攻はご覧のとおりで、大学はクラシック音楽寄り、短期大学部はポピュラーが特徴かと思えます。ほとんどの学生が作曲や演奏など、音楽の実技を中心に学んでおります。

そのような中で、ライティング支援というのはあまり重視されないという状況があったのですが、2010 年、文部科学省の就業力 G P をきっかけとして、日本語ライティング支援室を設置しました。スタッフは現在 6 名おります。ライティング担当が

私と助手を含めて 2 名、それからデザインが教員と職員で 2 名、また、ウェブなどで 1 名と、インターンシップとかキャリアの担当で 1 名おります。

少し珍しい特徴としては、デザイン担当というのがライティングの中にわざわざいるということかもしれません。これはメリットがありまして、例えば、この黄色

い冊子は当室で発行しました書き方の教科書なんですね。中身は、レポートの書き方とか、エン

トリーシートの書き方とかで、ごく普通のライティングのマニュアルの冊子なんですけれども、ぱっと見た感じ、カラフルで、割と目立つ感じかなと思います。学生がぜひ手にとりたくなるようなライティングの何かというのをつくりたくて、デザイン担当のスタッフを中心につくりました。現在では、学生から黄色い本というふうに呼ばれて、ライティングのシンボルのような存在になっております。

そのほか、当室の主な仕事はこういう形になっております。後でご紹介いたします個別相談の受

付と、それからこの黄色い本を初めとする教材の作成と、また授業の担当、それからキャリア支援センターと一緒に講座とかトークイベントを実施したり、課外活動、P B L 等のプロジェクトを企画運営したりしております。

次に、「社会とは？」として、本学が置かれている社会の状況について少しお話をさせていただきます。



本報告の目次
1. 本学の概略
2. 「社会」とは ——どんな力を身につければよいのか？
3. 取組紹介
①名刺作成講座
②個別相談受付
③フリーマガジン作成
④演奏会記録

1. 日本語ライティング支援室の概略
●個別相談受付 授業レポート、エントリーシート、チラシ作りなど
●教材作成 2011年3月『writing note』など
●授業 レポートの書き方（初年次必修）、日本語ライティング演習、ポートフォリオ作成演習
●講座・トークイベント 名刺作成講座、敬語講座、実用日本語書き方講座など
●課外プロジェクト 演奏会記録作成、フリーマガジン作成、他大学との連携PBL企画

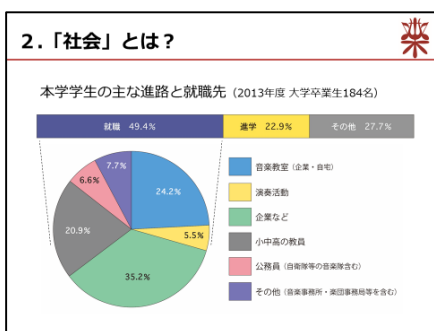
まず、こちらが2013年度の、本学学生の主な進路と就職先なんですけれども、約半数が就職で、残り4分の1ぐら

いが進学とか留学で、さらに残りの「その他」が結構割合が多いんですけれども、音楽家としてひとり立ちするための修行中というような感じです。就職先もこの下に載せておりますが、音楽関連の就職先というのが多数を占めます。ピアノ教室などの音楽教室、それから交響楽団などに所属する演奏活動、一般企業でも楽器製造メーカーというような音楽関連の企業が多数あります。それから、小中高の音楽の先生と公務員、こちらも自衛隊の音楽隊というような、演奏家としての公務員というのがあります。その他も音楽事務所とか、NPO法人とか、楽団の事務局とか、そういった先が多数を占めております。

このような状況を見ますと、昨今、大学教育において「社会」という場合には、非常に狭い意味で一般企業ですとか、産業界というものを指示して、そこに適応するキャリア教育が求められる傾向があるように思います。ただ、本学のような進路状況を見ますと、音楽大学の学生の場合は、音楽を共通項にして、社会としては非常に広いものを想定したほうがよいのではと本学では考えております。

それは、例えば、演奏を依頼するクライアント、これは個々の小さい飲食店の店主さんであったり、企業の方であったり、病院とか福祉施設とか学校であったり、さまざまです。それから、学生がたくさん接する音楽教室の生徒さん、こちらも以前は子供さんが中心の教室だったそうなんですけれども、最近は高齢者が多い。教室によってもすごく細分化されたいろんな教室があります。

また、就職先の企業ですとか、演奏会のお客様と、



あと教職員とのつながり、これも、もしかしたら、音楽大学特有かもしれないんですけども、教職員というのは、一方で大概ミュージシャンとか演奏家としての顔を持っている者がかなりの割合を占めます。ですので、在学中に、ある種弱肉強食といいますか、教職員との人脈、コミュニティーをつくっておいて、それが一生の財産になっていく。だから、きちんとコミュニケーションをとれた者勝ちというところがございます。そのほか、もちろんステージスタッフというようなものもありまして、社会といいましても、企業への適応に限定せず、あらゆる年齢、社会的立場の人とのコミュニケーションを積極的にとっていく必要があるだろうというふうに見ております。

以上を踏まえまして、ライティング支援で目指すものとして、本学では以下の3つの力をイメージしております。

1つ目に、説明、プレゼンテーションの力。誰に対しても、どのような相手に対しても、わかりやすく、きちんと物事を説明すること。できれば、それが魅力的なプレゼンになるように、語彙など表現の引き出しをどんどんふやしていくこと。

2つ目は、「論理の力」と呼んでおりますけれども、ばらばらの事実から仮説を構築し、一つのまとまった流れをつくれるようになること。

最後に、内省や洞察の力。音楽をすると、言葉にならない体験をして終わったというふうになりがちなんですけれども、それらなるべく言語化して、自分で掘り下げて内省していくことで、経験を言葉にして発見、気づきをふやす。さらに、その発見を蓄積し応用していくこと。

この3つの力というのは、特に教育目標というふうに明確に掲げているわけではないんですけども、4年ぐらい本学でやってきまして、現在、こういうところをうちとしては目標として据えていいんじゃないかというふうに学内で共有しているイメージです。

では、これを踏まえまして、具体的な取り組みを4つご紹介したいと思います。

まず 1 つ目は、名刺作成講座です。これは、伝える、プレゼンするライティングのきっかけづくりというふうに位置づけております。

内容は、昼休み30分間を利用したミニ講座で、1人1台パソコンを使わせて自分の名刺をつくるというものです。名刺の現物と、あと印刷したデータ、10枚だけなんですけれども、持ち帰られるようにしますので、学生にとっては30分間の参加で必ずお土産がある状態ですので、それを終わった後で配って、つくってよかったというふうに後から実感しやすい。さらに、それが学生同士の口コミで広まりますので、次から次へと参加者が途切れずに来るという形になっております。

また、この講座は、先ほどの津田塾大学様のライティングカフェと少し位置づけが似ているのではないかなと思うんですけれども、日本語ライティング支援室という場所を初めて体験するきっかけにもなっております。1人1台のパソコンで、ほぼ個別指導の形式で話を聞けること。また、ここに2枚、名刺を載せておりますけれども、片方が、ピアノがついているほうが、音楽活動用、演奏活動用の名刺です。もう一つは、就職活動とかインターンシップとかで使うような名刺です。それぞれいろんな顔を使い分けますので、どういう目的に応じて、どんな情報を掲載すればいいのか、学生が目的を考えて何かを書くというそういう体験ができます。また、構成、きっちり書こうとか、レイアウトとか、画像の著作権に注意することなど、大概、日本語ライティング支援室で学生に注意する基本的な事柄がいろいろ入っております。スタッフとしても、最初に入った若いスタッフは、この名刺講座を担当してみて、学生との接し方を学ぶと

3. 取組紹介 ①名刺作成講座

「伝える」ライティングのきっかけ作り

- 気軽に参加できる
昼休み30分間のミニ講座／毎月開催
現物を持ち帰れる
必要性を実感しやすい→口コミで広まる
- 支援室利用のきっかけになる
ほぼ個別指導形式
目的に応じて書く情報を選択する経験ができる
校正・レイアウトへ・画像著作権などへの注意



のような形にしております。

2 つ目、個別相談の受け付けです。こちらは、レポートとかエントリーシートとか、さまざまな書類について

、毎日、書き方相談を受け付けるというものです。

やり方としては、気軽に利用させることを注意しております。小規模な大学ですので、毎日、予約不要で、特に制限時間も設けずに、いつでも思い立ったときに来室させています。10分程度で質問のみ、ぱぱっとしていく学生もいれば、授業の学習支援のような形で2、3時間、長く滞在して、いろいろ話していく者もおります。基本的には、まとまった文章を書く経験を支援して、「論理の力」を身につけさせることが目的ですが、実際の学生対応では、支援室の役割をあまり限定せずに、学生の様子を見て進めております。

とはいえ、一方で、ライティング担当のスタッフというのは、私と助手の2名しかおりませんので、際限なく受け付けるわけにはいきません。効率よく対応する必要があります。そこで、普段から、あらかじめ、いろいろな書類を教職員や学外の方から事あるごとに収集しております。今、学生がどんなものを書かなければならないのか、そのときにどういう問題が起こりやすいか、学年によるスキルの違いはどうか、そのようなヒアリングをして蓄積しています。また、文書ごとの解決パターンをなるべく蓄積するようにして、例えば、インターンシップ関連というのは、座学の講義をまとめてやることで、かなり学生は書けるようになるというのがわかってきましたので、一斉の座学に力を入れました。その結果、インターンシップ関連で個別相談に来る学生は、恐らくいい意味でだと思えるんですけれども、減ってきております。

ちなみに、対応した文書の内訳は、このようになっ

3. 取組紹介 ②個別相談受付

さまざまな書類について、書く経験を増やす

- 気軽に利用させる
毎日受付／予約不要／制限時間なし（学生の集中力とマナーによる）
- さまざまな文種に対応できるようにする
・実例を教職員や企業等から収集しておく
…演奏活動関係書類、補助金申請書類、招待状、多様な広報物
・文種ごとの解決パターンを蓄積する
…インターンシップ関係→書き方資料の配布や座学の講義
…就職活動関係→授業レポート→個別対応が必要

ております。半分が就職活動関連で、エントリーシートと教員採用試験の小論文対策です。次に、音楽活動関連、プログラムノートと呼ばれる曲目解説の文章、それから補助金等の申請書類、イベントの企画書、あとデザインスタッフがおりますので、チラシなどのつくり方、それから演奏依頼をこなすためのいろいろなメールの書き方です。それから、19%ほどが授業関連、またインターンシップ関連、それから留学や進学の自己推薦書など、日本語で書けるものに対応しております。

来室のタイミングは、大体3つに分けられます。文章を書く前、執筆途中、書き上げた後の推敲段階、これは全部同じぐらいの割合で来ます。どれも多いです。書く前の場合、先ほど津田塾大学様でもおっしゃっていたように、何をどう書けばいいかわからないという形で駆け込んでくる学生が大半なんですけれども、それはつまり、書く目的や手順がわからない、そういうタイプの文章をしっかりと書いた経験がないので、ゴールをイメージできないというようなことを意味しています。

そこで、まず目的や手順を教える、それから、その場で手を動かして材料を考えさせたり、構成のメモをつくってみたりというような作業をします。最終的に学生がこれなら書けそうというふうに意欲を持ったなというところで、じゃ、今日はおしまいというふうに帰すようにしています。経験不足のために、毎回書けない、苦手意識を持つ学生が非常に多いのであれば、とにかく1つでも2つでも書かせて経験を積ませることが重要であると思っております。

執筆途中と推敲段階でも同じことで、教えて、その場で何か作業をさせて、30分、1時間、学生の様子とスケジュールを見て、切りのいいところでその日のまとめをさせるという流れです。

多くの学生は、その流れの中で、「書く」という作業における問題意識を持つ、こんな問題が起きるんだなというのを体験します。また、それを直すためには、こういうやり方があるんだなというのも体験し

ます。その手応えを踏まえた後で、最後に、この考え方、書き方というのはほかでも応用できるから、できるだけ繰り返し書きましょうというふうに励ましています。

ちなみに、このような方法でやっていて、うまくいくことが多いと思うのは、教員採用試験対策の小論文です。高校の先生方でもそういうふうにおっしゃる方が多いんですけれども、1つ書いて、持ってきて添削を受けて、アドバイスをもらって、また書いて、また持ってくるというふうに、反復練習をしやすいものですので、目に見えてどんどん書けるようになります。授業のレポートでも、同じタイプの課題をちょつとずつ変えて、繰り返し繰り返し出してくださる授業の場合は、学生が繰り返して来室しますので、非常に上達が目に見えます。

また、就職活動のエントリーシートの場合は、書類の性格が非常にプライベートなものですので、単純に教えればいいというものではなくて、自己分析を一緒にして、肯定してあげたり、その学生が本当に企業に対して訴えたいことは何なのかという、個性の出し方のようなものを見てあげたりすると、意欲が高まることが多いです。

一方で、失敗というのも数え切れないぐらいあるんですけれども、特に失敗だったなというのが、授業のレポートで、担当の先生のほうから、成績をつけ終わったが、レポートのできばえがよくないので、ライティング支援室のほうに全員順番に行くように伝えてくださったんです。でも、実際には学生はそう言われても、すでに成績がついていますので、非常にやる気がなくて、嫌々来て、嫌々推敲して、やる気なく帰ってしまうという形になってしまいました。来室のタイミングというのは、支援室でコントロールできないことのほうが多いんですけれども、明らかにいいタイミング、効果が出やすいタイミングというのはありますので、そういうタイミングを逃さずつかむように工夫していきたいなと思っております。

さて、取り組みの 3 つ目です。こちらはフリーマガジンの作成です。ものづくりの達成感を味わえるライティングというふうに位置づけております。



内容としては、これもここに、小さいサイズなので、ご覧いただけるかどうか分かりませんが、こういう B 6 サイズの小冊子フルカラーのもの、これで 20 ページぐらいなんですけれども、つくっております。最初はスタッフだけでつくっていたんですけれども、2013 年度から学生記者の募集をするようになりました、毎号 10 名ほどで、2、3 カ月で 1 冊をつくります。最新号は、こちらに出ているもので、12 号、特集記事、インタビュー記事、お勧めコラムというような内容になっております。学ばせる内容というか、特に注意ポイントとしては、読者を意識して材料集めと見せ方を学ぶというふうにやっております。

作業の流れとして、2、3 カ月で、まずテーマを決める、それから、材料を集める、それから、それを選んで組み立てる、最後に校正をさせるという流れなんですけれども、この中で学生が、いつも感想を聞いたときに、楽しかった、よかったというのは材料集めの作業です。取材をするのが楽しい、社会人にインタビューするのがおもしろかった、また、社会人の方と、インタビューのアポイントをとらないといけないので、きちんとしたメールのやりとりをして、最後、原稿のチェックのためにもメールをお送りしたりする、そういうやりとりの一つ一つが非常にいい経験になったというふうに言う者が多いです。また、材料を組み立てて、読み手に何かしらのストーリーを伝えられるように文章を組み立てていくというのも新鮮に感じるようです。レポートだと構成を考えるのが苦手でも、記事づくりだと楽しんで取り組むことが多いように思います。普段から何かコンセプトを持っ

て文章を書くという体験を、あまりしていないのかなというふうに思います。

逆に苦勞するのが、紙面を実際につくる部分と、最初のテーマの掘り下げです。例えば、テーマですと、自分の好きなものをおたたくにばっと語りたい、読み手のことは割とどうでもいいというふうに思っている学生が時々おりまして、そういう場合、なかなかテーマを絞り切れない、テーマの基準は自分が言いたいことしかなくて、それを客観視できないというところで行き詰まります。また、紙面づくりの場合、例えば、同じような写真ばかり 20 枚も 30 枚も撮ってしまって、実際に掲載できるものはそのうちの 1 枚しかないで、時間がかかって、本人ができたと思っている割には紙面がまだ真っ白で、何も埋まっていないことがあります。目的を持って、その原稿をつくっていくという作業、その繰り返しを学生に何度も注意するようにしています。

なお、具体的な紙面、ちょっとふざけているように見えるかなと思って、お恥ずかしいんですけれども、これは学生同士のインタビュー記事です。これは、やっている学生がユーモラスな雰囲気、楽しそうな雰囲気を絶対出したいというふうにいろいろ決めまして、あえてこういうふうの一つ一つのレイアウトを決めたり、画像をこういうふうに配置する、写真はこんなふうに撮る、最後に吹き出しなど一つ一つつける、文言、見出しなどを決めてつくっていききました。

さて、4 つ目、最後の取り組みです。こちらは、演奏会記録の作成というもので、内省のためのライティングと呼んでおります。



具体的には、学生は非常にたくさんの数のライブ、コンサート、演奏会に日々出演しているんですけれども、そのライブが終わった後に、メールで演奏会記

録と呼んでいる実習日誌を教職員に向かって提出します。中身はインターンシップの実習日誌などを参考にしてつくったもので、客層とか選曲などの項目を指定して書かせ、それぞれ、なぜそういう選曲にしたか、なぜそういう対応にしたかというのを説明させます。また、お客様の小さな反応というものも、できるだけ書きとめるように促しています。

対象とするライブは、教職員がスタッフとしてついているもので、つまり、日誌を評価する相手が必ずいるという状態にしています。例えば、毎月 2 回ずつぐらい、定期的にライブハウスと連携させていただいてやっている勉強のライブというのがあるんですけれども、そちらなどで、学年、専攻を問わず、数十人の学生が毎日入れかわり立ちかわり出演するんですけれども、そこで導入しています。

また、これは PBL、授業ではなくて、うちでは課外活動なんですけれども、それとの相性も非常によく

て、有馬温泉ゆけむり大学という泊まりがけでやる PBL が年に 1 度あるんですけれども、毎晩、学生たちが演奏会記録を書きながら、この写真のように反省会をしています。特に、ライブでリーダーを務めるような学生は、演奏会記録に対して非常に積極的です。コンサートの現場というのは、いつも非常に慌ただしいものなんですけれども、記録を書くことで、言えなかったことも形にする、学生同士の交流が生まれるという効果があります。

また、最近では、本学のブログで演奏会記録の一部を職員が学生の許可を得て公開し、立ち会いの職員がそれに対して、そこはよかったねとか、それだと今後こういうやり方もあるよというふうにコメントをつける。それを見て、ライブに参加していないほかの

学生や、教職員が成果を共有していく。そのような広がりも、少しずつですけれども、生まれてきております。

以上 4 つの取り組みをご紹介します。

最後に、本学での課題を上げて、発表を終わらせていただきたいと思います。

課題は、より多様な読み手を確保すること、具体的には、支援室の外に働きかけを行うことです。演奏会記録であれ、フリーマガジンであれ、読み手がいるというのが、学生にとっては意欲も上がりますし、実際、成長としても大きいんですけれども、支援室の中だけでは限界があります。そこで、今後は、できるだけ教員に対して、いいタイミングで書いたものに対してフィードバックがいただけるように依頼をすること、また、学生同士で問題点を指摘し合えるようなシステム、これは授業などでピア・フィードバックなどを取り入れられればなというふうに思っております。また、学外に向けて、インターンシップとか、PBL とか、フリーマガジンなどを通してプレゼンテーションをしたり、声をかけていただくようなそういう場を積極的につくっていければいいなと思っております。

以上で、本学からの報告を終わらせていただきます。

